



新・農業経営者ルポ／第80回

苛烈な農地改革を経験しても 失わなかった干拓農民の誇り

苛烈な農地改革を経験しても 失わなかった干拓農民の誇り

日本は間もなく農業開国を迎えることもあり、これからの農業経営者にはグローバルな視点が求められてくるだろう。本誌ではこれまで以上に海外の農業および農業経営者の情報を提供していく。今回「新・農業経営者ルポ」で取り上げるのは発展著しいインドの稲作経営者。農民が農業経営者に生まれ変わろうとする息吹がそこにはあった――。

撮影・取材・文／井生明

穀倉地帯を干拓した 農民の系譜に生まれて

ジョセフは干拓農民の子孫である。19世紀の初めに曾祖父・チャンドが、約30km離れたコターヤムという町から広漠たるヴェンバナード湖を舟で渡り、ジョセフが生まれ育った、インド南西部のケーララ州クッタナードにやってきたという。クッタナードは湖や川、運河・水路が入り混じる水郷地帯で、世界でも数少ない、海抜下で農業が営まれる場所。南国らしく水にあふれた風光明媚な景色を求めて海外からも旅行者が訪れる観光地でもある。

「その当時は1km四方に一家族しか住まないような閑散とした場所で、道もなく移動は小舟。住民は主に漁労で生計を立てていたそうです。曾祖父は盗賊もよく出たというこの地を人力のみで干拓し、より良い生活を求めて農業を始めたのです」

と誇らしげにジョセフは言う。

山がちなケーララ州では、稲作に適した土地はクッタナード以外にはさほど多くない。多くの農民が苦勞を重ねヴェンバナード湖の5分の1近い面積を干拓し農地に転換して以降、クッタナードは「ケーララ州の穀倉庫」と呼ばれるまでになった。

ジョセフの祖父・マータンは、時には盗賊に襲われながらも不屈の精神をもって水にあふれた土地を農地へと変え、今もジョセフ一家が住む家を建て、子供たちにはしっかりとした教育を与えようと血のにじむような努力を重ねた。祖父のお陰でジョセフの父・コラは1920年、当時の農家としては珍しく大学に通う。法律を修めるため学生時代を南インド一の大都市マドラスで過ごしたコラは、インド独立前の高揚した空気に触れる。卒業後地元に戻ると、農場経営をしながらも弁護士として働き、政治運動へと突き進みイ

ンド独立運動に加わった。トラヴァーノール王国（現在のケーララ州）の国会議員にもなり、その後は2期10年に亘り農業大臣を務め、農民の貧困改善に尽力。インド独立後、ネルー首相がクッタナードを視察に訪れた際に、自らの祖父がたどったようにコターヤムから舟で当地を案内し、農民の窮状を訴えたという。クッタナードを東西に貫く道路の建設、電力の供給開始、肥料に対する補助金交付などは全てコラの業績である。だが、当時の政治家は清廉潔白。コラも私腹を肥やすことなく、大臣を務めたとはいえ、さしたる財産があつたわけでもなかった。55年に政界から身を引いた後、しばらくは農場に立つが健康状態が悪化したため次世代へと経営のバトンを渡した。

ジョセフの就農と農地改革 そして集落の崩壊

69年、ジョセフは27歳で就農。二人が米国に留学するなか近隣の大学で商業を学んでいた三男のジョセフに跡継ぎとして白羽の矢があつた。

「男兄弟の中では一番私が穏やかな性格なので雇っている農業労働者ともうまくやっていると父は思ったのでしよう。農業に興味はあつたので、跡を継げと言われても特に驚き



ジョセフ・コラ Joseph Korah

インド共和国／ケーララ州クッタナード

1942年、インド南西部のケーララ州に生まれる。干拓農民の子孫として農業大臣を務めた父の農場を69年に引継ぐ。99年に稲作とテナガエビ養殖の複合経営を開始。有機認証を得た現在コメは国内販売、エビはドイツに全量販売している。就農当初は一族全体で60haあつた農地も農地改革による接収で自身の現在の経営規模は4haに留まる。

ませんでした。それよりも受け継いだ農場を発展させなければという責任感で胸がいっぱいでした」

だが就農後2年で父のコラが他界。農業の技術的な部分を十分に教わる間もなく、手探りでスタートとなった。容赦ない時代の流れはその後、数十年に亘りジョセフを翻弄する。

ここでインドの農業政策に触れておきたい。インドは47年に英国から独立して以降、農業生産の拡大、貧困問題の解消、所得と富の不均衡の是正が検討された。そして農地改革は社会正義実現のための制度改革として位置づけられてきた。

ジョセフが就農直後の70年初頭から苛烈な農地改革が始まった。その内容は、農地所有上限が設定され、上限を超えた農地は余剰地とし接収され、農村の社会・経済的弱者に分配するというものである。先祖代々干拓してきたジョセフ家の農地60haも半分の30haになった。

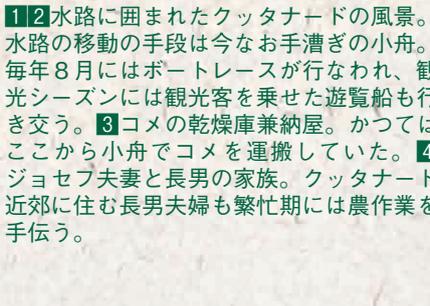
海抜下のクッタナードでは雨季には農地全体がどっぷりと水に浸かる。そのため農期の始まりはまず農地に堤防を築き、たまった水を排出しなければならぬ。それ以外にも害虫の一斉防除など共同体で一丸となつての共同作業が不可欠だった。だが農地改革で一般の農業労働者が

土地を持つことにより、この共同作業が成り立たなくなってしまう。農地改革は、皮肉にも共同体内の農業の構造を破壊してしまった。

低米価政策で稲作経営から撤退する農民が相次ぐ中で

「60〜70年代はコメの買取価格も高く、稲作農家にとってはまだ幸せな時代でした。けれどもその後の80〜90年代は『暗黒の時代』でした。買取価格が下落し、全く儲かりませんでした。借金も積もりに積もって、300万ルピー（現在のレートで約800万円）にもなっていました」
役所などに勤める公務員の月給が現在でも4〜6万円ほどのインドでは、その負債額は想像を絶する。

ケララ州のみならず、インド南部はコメを主食とし（北部は小麦）、各州政府はコメの生産に対し厳しく管理している。ケララ州では農地登録をコメとしている土地ではそれ以外の作物を栽培できず、登録変更をすることもできなかった。共産党の勢力が強いこともあり（州政府ではほぼ一貫して与党）、工業労働者主体の政策が推し進められ、州政府のコメの買取価格も工業労働者向けに低く抑えられている。そのためジョセフの近隣でも金になるスパイス、ゴム、茶などの換金作物栽培に



1 2 水路に囲まれたクッタナードの風景。水路の移動の手段は今なお手漕ぎの小舟。毎年8月にはボートレースが行なわれ、観光シーズンには観光客を乗せた遊覧船も行き交う。3 コメの乾燥庫兼納屋。かつてはここから小舟でコメを運搬していた。4 ジョセフ夫妻と長男の家族。クッタナード近郊に住む長男夫婦も繁忙期には農作業を手伝う。

苛烈な農地改革を経験しても 失わなかった干拓農民の誇り



6



5

5 ジョセフ邸は祖父・マーティンが築いた。
6 昼食の様子。7 庭で撮影した家族写真。
前列中央がジョセフの両親。後列右端が
ジョセフでその手前が妻のタルニ。8 ジョ
セフは数々の農業賞を受賞している。
9 ジョセフの作ったコメ。ケララ州固有
のコメでぷっくりとした形をしている。脱
穀前に一度茹でて乾燥させるため、精米後
赤い胚芽成分が残るのが特徴。



9



8



7

転換するためクッタナードを離れる者も相次いだ。ジョセフも弱気になり一時はクッタナードを離れ換金作物の栽培に適した土地へ移ろうかとも考えたという。

「母が頑として首を縦にふりませんでした。先祖が死ぬ思いで干拓し家を建て、父がインドの独立そして農民の状況改善のため東奔西走した日々を過ごしたこの地を離れることはできなかったのです」

ジョセフは最愛の母がそこまで思っているのならばと奮起した。だが学齢期の子供を5人抱えての生活は厳しい。コメがあまりにも金にならないため80年代半ばには一時、家の前の水田での稲作さえやめていたこともある。そんなジョセフを父の古くからの友人が叱咤激励した。

「あなたは土地を受け継いだだけでは干拓の苦勞はしていないではないか。先祖の苦勞を思い、父母への感謝の気持ちがあるならば、稲作は続けるべきだ。あなたの家は農家でありながらインド独立のために尽力し、農民の状況改善のために大きな貢献をした共同体内でも重要な家。そんな家が稲作をやめたとすると評判も落ちるし、士気も下がる。成すべきことしっかりとやるべきだ」

ジョセフは目が覚める思いにとられ自分の甘さを悔やんだ。自分で

も気づかぬうちに、弱気になっていたのである。またあらためて共同体内での自分の家の占める地位と役割をも痛感させられた。自分の家族だけでも精一杯なのに、労働者のことや共同体全体をも考えなければならぬ重圧がジョセフを襲う。とはい

もっとも意識は変わっても、状況はなかなか好転しなかった。農地改革後のコミュニティの崩壊、コメ買取価格の低迷に加え、クッタナード全域で積年の農業・化学肥料の大量使用による地力・収量の低下に見舞われるという三重苦。家計はまさに火の車で、妻のタルニもサリーやアクセサリーを少しずつ売っては糊口をしのいだ。

「この時期は確かに辛かったですね。けれども父の口癖『なせばなる』『継続は力なり』という言葉をいつも思い浮かべながら、必ず乗り越えてやると思っていました。父は強靱な意思を持った人で、独立運動中には2度、3年間にわたって投獄されていますが、獄中から戻って来た時も打ちひしがれて下を向くこともなく真っ直ぐと顔を上げていました」

かつての父の姿を支えに、気持ちだけで生きて行く日々が10年あまり続いた。

お上に楯突きたくはないが 自分たちが生きゆくためには

99年、地元NGOが提唱していた稲作とテナガエビ養殖の複合経営を、ジョセフは始める。この経営モデルは90年には提唱されていたが、穀倉庫であるクッタナードの農家が基幹作物であるコメの栽培から離れることを危惧する州政府が許可を出さなかった。州政府は従来どおり、

コメの二期作を勧めるものの買取価格は相変わらず低く、コメを作れば作るほど赤字が続く有様だった。ジョセフはもはやこのままでは持ちこたえられないことを自覚し、農場で雇用している労働者を説得し、州政府の許可のないまま、この複合経営に挑戦することを決めた。

「父はいつも労働者のことを考えて仕事をするように言っていました。

『儲けが少なくても土地は必ず耕しなさい。それによって彼らの生活を守り、共同体としてのクッタナードが守られることになるのだから』と。父は何よりもまず農業に生きる共同体全体のことを考えていたのです」

だが、高米価だった父の時代には当然のようにできたことも、ジョセフの時代には容易ではない。父の言葉のように農場で雇用している労働者を解雇することなく、しっかりと

賃金を払いながら経営を成り立たせるためには、金になる作物を作るしかない。ジョセフはお上に楯突くことにはためらいはないわけではなかったが、迷っている暇はなかった。この複合経営を開始すると同時に、ジョセフは毎日、州政府の地区事務所にて認可を求めて陳情に上がる。穏やかな性格のジョセフが起こした行動と情熱に州政府も折れ、2002年によく認可された。

ジョセフの農場では11月から翌3月は稲作。稲刈りを迎える3月頃から水田脇に作った養殖池で稚エビを育てる。稲刈り後の水田はエビ養殖にそなえて土壌の酸性度を調整し、6月頃に養殖池と水田を隔てる畦を切り崩し、稚エビを移す。その後4カ月にわたりエビを育て、10月には水を抜きエビを収穫。その後再び稲作を行なうというサイクルだ。

当初、有機栽培を目指してはならず、適度に化学肥料を使用していた。だが、脱皮を繰り返すエビの抜け殻や、田に生える藻草を食べさせるためにエビと一緒に育てていたコイのフンが土壌の肥やしとなることが判明する。調べてみると、窒素やリンはさらに投下する必要はなく、カリウムを追加するだけでよかった。そこで、まずは稲作を有機転換し、05年にはエビ養殖も有機へ転換。試行



11



10



13



12

10所有する水田は4ha。11ジョセフと共に働き始めて40年になる労働者のジョンは大きく育ったテナガエビを自慢げに見せた。12農場の看板には“ORGANIC”が記されている。13農場の見張り小屋。カワウソなどの小動物が農場を荒らさないように見張る。真ん中の柵の左が稚エビの養殖池、畦を隔てたその左が成長したエビの養殖池となる。

苛烈な農地改革を経験しても 失わなかった干拓農民の誇り



15



14



17

14 15 投網を投げるジョン。1日数回小舟で養殖池や水田を巡回し、異常がないか確認するのも彼の仕事。16 テナガエビのエサ。エサもドイツの有機認証を得てインドで生産している。17 ポンプ小屋。エビの生育が終了すると、水を排出し収穫する。



16

錯誤を重ねながらも、08年にはコメ・エビ両方の生産で有機認証を得た。今では4haの農場で年間2万tのコメと2.5tのエビを生産する。コメは有機認証前の約2.5倍、1kgあたり17ルピー（約34円）で民間の販売所へ、エビは有機認証前の倍にあたる1kgあたり250ルピー（約500円）で環境先進国であるドイツの商社に全量販売し、その利益率は50%にもほる。

就農40年にして初めて持った夢とは

ジョセフはこう振り返る。

「農業を手がけて40年が過ぎましたが、この10年でやっと経営も黒字になり借金も返済できました。私の仕事も各方面で評価され、たくさんの賞ももらうことができました。今は自信を持って農業をやり夢も持てるようにもなりました」

だが、ジョセフは軌道に乗り始めた稲作とエビ養殖の複合経営の現状に決して満足はしていない。「まずは機械化による作業の効率化と規模拡大です。米国にいる兄名義の土地を管理しているので、それも含めて農場を10haにまで拡大しようと思っています。やるべきことはたくさんありますよ」と彼は笑う。

就農後40年にしてようやく持てる

ようになった夢とは何かと訊いてみた。

「使わなくなったコメの乾燥庫を建て直してゲストハウスにし、クッタナードの自然と農業体験を組み合わせたエコツーリズムを始めたいと思っています」

そして、さらに言葉を紡いだ。

「しっかりとした経済的見返りがあってこそ、現代の若者は農業に魅力を感じます。今では農家の子供ですら、両親が経済的にも報われず、肉体的にも苦労しているのを見ています。農業を継ごうとは思わないのです。農業が誇るべき産業だと若い世代に示さなければいけません」

ジョセフのその言葉には、儲からないながらも地域共同体の中での役割を放棄せずにクッタナードの地を耕し続けた40年間の苦労がすべて封じ込められているように感じた。

製造業やIT産業がインド経済を牽引しているのに対し、インドの農業・農村には貧困問題を始めとする課題が数多く残されたままである。だが、そのような中でも、不屈の精神を持った干拓農民の子孫は時代の波にもまれながらも、それぞれの成すべきことを成しバトンをつないできた。そして今、ジョセフのバトンが、次の世代へ渡されようとしている。